本で触れる十代のリアル

授業づくりに役立つ本、授業とからめて生徒に読ませたい本などを紹介するリレー連載。今回のご担当は、兼森理恵さん（丸善丸の内本店 児童書担当）です。

十代の頃にたくさん本を読んでいてよかったなあと思ったのは、結婚した時だ。いたって普通の家庭に育ったつもりだった。でも、きちんと同じ時間に食卓を囲み、誰かがちょっとでも危ない目に遭いそうになると、この上なく心配するような家族の出てくる物語を読むたびに、「これはお話の中だからだ」と違和感を覚えるような子どもだった。だから、大人になって出会った夫の家族に本当にびっくりした。だって、「本で読んだまんま」だったのだ！　物語を通して知っていてよかった。何食わぬ顔をして、私は今、その一員でいる。

この二十年ほどで、いろんな問題に直面する子どもたちや家族の姿が描かれた作品が数多く出版されている。私のように、典型的な家族の姿に違和感を抱く子どものお話も少なくない。私もそういう本を十代の頃に読めていたら、もっと楽になれていただろう。全く違う個性が、同じ教室に閉じ込められる窮屈な学校生活。でも、「個の違い」を理解するだけで、少しだけ生きやすくなるかもしれない。というわけで、そんな思いを抱える中学生に向けて、十代のリアルがぎゅっと詰まった四作品をおすすめしたい。

誰もが通る一瞬のきらめきを見事に切り取った一クラス二十四人全員が主人公の『クラスメイツ〈前期・後期〉』。ありふれた日常の中で感じる思春期に伴う痛みや閉塞感。でも、そこから続いてゆく未来があるからこそ希望のある読後感。

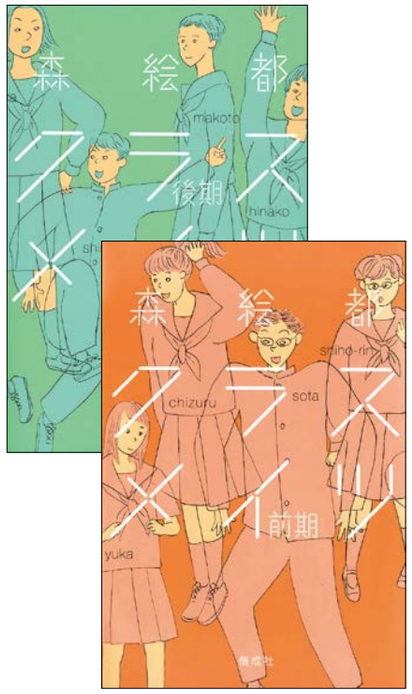
『給食アンサンブル』は六人の中学生が給食をきっかけに少しずつ成長していく物語。毎日みんなが同じものを食べるって、よく考えるとなんだか不思議。でも、その味の感じ方はきっと人それぞれだろう。

七人の高校生と三人の中学生が主人公の短編連作『きみのためにはだれも泣かない』は、人とのかかわりを通して自分を見つめることの大事さ、己を知りその行動に責任を取ることが未来に繋がっていくということが強く伝わってくる。

『15歳、ぬけがら』は社会問題を取り扱っている。貧困に苦しみ日々を生き抜くことが苦痛な子どもたちがいることを知るきっかけになってほしい。

共感してもしなくてもいい。知ることが大事なのだ。そして、他の人を通して自分の姿も、きっとくっきり見えてくる。

丸善丸の内本店 児童書担当
兼森理恵（かねもりりえ）
1976年，東京都生まれ。99年，ジュンク堂書店入社。池袋本店，新宿店を経て，現職。児童書担当。書店業のかたわら，絵本レーベル「らいおんbooks」にも携わる。



クラスメイツ〈前期・後期〉
森 絵都 著
偕成社／2014年

きみのためには だれも泣かない
梨屋アリエ 著
ポプラ社／2016年

15歳、ぬけがら
栗沢まり 著
講談社／2017年

給食アンサンブル
如月かずさ 作
光村図書出版／2018年